



2015年 全国多胎サークル調査

結果報告（第1報）

石川県立看護大学 健康科学講座

大木秀一



ご 挨拶

現在、年間に出産する女性のおよそ 100 人に 1 人が多胎児の母親となっています。毎年、同じだけの多胎家庭が誕生しています。多胎育児の負担が大きいことはこれまでの数多くの調査研究からも明らかです。このような状況で同じ体験をした親たちが集まって様々な経験を共有し、育児に対する知恵を出し合っていく多胎サークルの存在は貴重です。多胎サークルが多胎育児支援の核と言えるでしょう。しかし、全国にどれくらいの多胎サークルが存在し、どのような活動を行っているのかはこれまで明らかにされていません。そこで今回、全国が多胎サークルの実態調査を行いました。多胎サークルの名簿のようなものはありませんから、可能な方法を駆使して、手作業で情報収集を行っています。全国各地に数多くの多胎サークルが存在し、多胎育児を楽しくしようと取り組んでいることを知るだけでも、励みになるのではないのでしょうか。今後は、多胎サークル同士がつながりを持ち、ユニークな取り組みを共有したり、運営上の課題の解決に向けて連携を取れるように働きかけていきたいと思えます。

なお、この調査と並行して、全国の行政機関・地方自治体および多胎サークルの会員に対する調査を実施しています。その結果は現在集計中ですので改めてご報告させていただきます。

2016 年 2 月

大木 秀一

〒929-1210 石川県かほく市学園台 1-1
石川県立看護大学 健康科学講座
E-mail : sooki@ishikawa-nu.ac.jp

「2015 年 全国多胎サークル調査」結果報告（第 1 報） 目 次

1. 調査の概要と今回の報告書について	1
2. 多胎サークル意向調査の結果	1
1) 都道府県別の多胎分娩件数と今回の調査に関わる多胎サークル数	
2) サークルの形態と活動状況	
3) サークル情報の公開や提供について	
4) 活動を休止中または終了したと回答した 33 団体の概要	
3. 多胎サークルの代表者調査の結果	3
1) サークルの基本情報	
2) サークルの活動内容	
3) サークルの運営主体と支援や連携	
4) サークル運営面での心配事や困っていること	
5) サークル運営について相談できる人	
6) サークルの運営状況	
4. 外部からの支援を活用し、積極的な活動をしているサークルの実践例	9
[自由記述から]	10

1. 調査の概要と今回の報告書について

今回の調査目的は、集団と個人、支援者と被支援者の立場を総合して、セルフヘルプグループ（自助グループ）としての多胎サークルの意義を明らかにすることです。そのためにまず、一定地域における多胎サークルの連携組織である地域多胎ネットなどから提供された情報や、Webサイトや冊子、地方自治体などから集めた情報で、全国が多胎サークルの同定調査を行いました。連絡先が判明したサークルには、郵送またはメールで連絡し、本調査への参加の依頼と意向確認を行いました。そして、参加の意向を示してくださったサークルの代表者と会員個人に対して、質問紙調査を実施しました。ユニークな活動をしている多胎サークルには聞き取り調査を行いました。また、サークルへの調査と並行して全国の行政機関・地方自治体に対して、多胎サークルに対する認識と支援状況を把握するための質問紙調査を実施しました。

以上を総合して、セルフヘルプグループである多胎サークルが継続的かつ機能的に活動するために必要な関わりや、行政等からの有効な支援を検討することが目的です。各調査についてはまだ分析の途中ですので、今回の報告書は多胎サークルへの意向調査と、サークル代表者調査の分析結果を中心に、第1報としてお届けします。

なお、多胎サークルについては、主催者が当事者から行政等に移行したものや、その逆などの移行が予想され、その経緯なども調査内容に含みます。そのため今回の報告書では、設置主体による区別はせずに集計しています。

2. 多胎サークル意向調査の結果

1 都道府県別の多胎分娩件数と今回の調査に関わる多胎サークル数

全国の自主的な多胎サークルまたは多胎の会だと思われる 259 団体に郵送またはメールで連絡を取りました。そのうち宛先不明やメールアドレス変更等のために連絡が取れなかった 22 団体を除く 237 団体のうち、2015 年 12 月 14 日現在 165 団体 から返信がありました（回収率 69.6%）。そのなかで、調査研究への参加の意向を示してくださったのは 117 団体でした。不参加（回答なしを含む）の 48 団体のうち、21 団体は自主グループではなく、17 団体（非自主グループ 1 団体を含む）はすでに活動を終了していました。

都道府県	※1 5年間の 多胎分娩数 (件)	※2 意向調査			※3 代表者調査 返信数 (通)	※4 新規判明 団体数 (件)
		送付数 (通)	返信数 (通)	不達数 (通)		
北海道	1,912	10	6	0	5	2
青森県	454	3	2	1	3	1
岩手県	436	3	2	0	0	0
宮城県	871	3	3	0	3	0
秋田県	281	1	1	0	0	0
山形県	396	2	1	0	1	0
福島県	692	3	3	0	1	2
茨城県	1,073	3	3	0	1	3
栃木県	896	3	1	0	2	4
群馬県	838	2	2	0	2	1
埼玉県	2,709	16	6	5	4	6
千葉県	2,439	11	3	2	1	4
東京都	5,496	16	9	1	4	6
神奈川県	3,619	16	6	1	5	1
新潟県	1,058	3	2	0	0	0
富山県	329	2	1	0	0	0
石川県	494	8	6	1	3	0
福井県	351	2	1	1	1	0
山梨県	287	4	2	1	0	0
長野県	830	9	5	0	2	1
岐阜県	751	10	8	0	7	1
静岡県	1,484	5	3	2	3	2
愛知県	3,607	10	6	0	4	5
三重県	623	4	2	0	1	1
滋賀県	778	4	3	1	3	3
京都府	1,241	10	4	1	4	2
大阪府	3,581	23	15	1	9	2
兵庫県	2,472	28	25	0	15	4
奈良県	589	4	4	0	1	0
和歌山県	315	1	1	0	1	1
鳥取県	249	3	1	2	1	0
島根県	293	0	0	0	0	0
岡山県	794	4	2	0	0	1
広島県	1,211	6	5	0	3	1
山口県	573	3	3	0	3	1
徳島県	381	2	0	0	0	1
香川県	433	6	5	0	2	1
愛媛県	521	4	4	0	3	0
高知県	256	0	0	0	0	1
福岡県	2,311	5	4	0	4	4
佐賀県	301	0	0	0	0	2
長崎県	555	0	0	0	0	0
熊本県	785	1	0	1	0	1
大分県	484	0	0	0	0	2
宮崎県	481	1	1	0	1	0
鹿児島県	751	4	4	0	1	3
沖縄県	762	1	0	1	0	0
計	52,043	259	165	22	104	70

※1 分娩件数とは出産（出生及び死産）をした母の数である
（2010～2014年の人口動態統計を用いて大木が2016年に編集した）

※2 2015年12月14日現在

※3 2016年1月29日現在

※4 2015年12月1日現在 行政機関に対する調査により紹介されたものである
（既に把握していた団体は省いている）

不参加と回答されたうち 11 団体は、活動中の自主グループでした。諸事情により 続いての調査にはご参加いただけませんでしたが、意向調査票の必要事項の記入やサークル情報の公開には同意して下さるなど、協力の姿勢を示してくださいました。

参加の意向を示して下さった 117 団体に代表者調査をお送りして、2016 年 1 月 29 日現在 104 団体から返信をいただきました（回収率 88.9%）。なお、行政機関に対する調査により新しく所在が判明した多胎サークルについては調査中のため、本報告書の結果には含まれていません。

2010～2014 年の 5 年間の都道府県別の多胎分娩件数（多胎妊婦総数）も記載しますので、参考にしてください。

2 サークルの形態と活動状況

多胎児の親による自主グループが 114 団体（69.1%）と約 7 割でした。行政や子育て支援者、医療関係者、福祉関係団体など、支援者が主催する会が 39 団体（23.6%）ありました。

活動中は 130 団体（78.8%）であり、2 割（33 団体）は活動を休止中か、すでに終了していました。

サークルの形態		
	(団体)	(%)
親の自主グループ	114	69.1
行政機関主催の会	16	9.7
子育て支援者主催の会	15	9.1
医療関係者主催の会	5	3.0
福祉団体主催の会	3	1.8
その他	7	4.2
無回答	5	3.0
計	165	100

活動状況		
	(団体)	(%)
活動中	130	78.8
活動休止中・終了	33	20
サークルではない	2	1.2
計	165	100

サークル情報の公開または提供の可否		
	(団体)	(%)
公開または提供しても良い	131	79.4
公開や提供を望まない	34	20.6
計	165	100

3 サークル情報の公開や提供について

サークルの連絡先等を、Web サイトで公開したり、多胎家庭等からの問い合わせに対して情報を提供することに同意して下さったのは 131 団体（79.4%）で、活動中のサークルでは 9 割以上でした。公開や提供を望まない 34 団体のうち 26 団体は活動を休止中または終了していました。

4 活動を休止中または終了したと回答した 33 団体の概要

(1) 活動期間

具体的な回答があった 21 団体のうち、5 年以下が 8 団体（38.1%）、6～10 年が 3 団体（14.3%）、11～20 年が 6 団体（28.6%）、21 年以上が 4 団体（19.0%）でした。約 4 割が発足から 5 年以内に活動を休止または終了していました。

(2) 活動休止または終了の理由

最も多い理由は「子どもたちの成長」(12 団体:36.4%)でした。続いて、「会員の卒会(会を卒業する事)・退会」と「新規会員が増えなかったこと」が 10 団体（30.3%）、「後継者がみつからなかった」が 9 団体（27.3%）といった会員側の理由をあげていました。「代表者の復職や就業」、「運営の精神的な負担」、「運営の時間的な負担」はそれぞれ 5 団体（15.2%）でした。また、4 団体（12.1%）が「Web 情報が充実してきたこと」を活動終了等の理由としてあげていました。

(3) 行政等からの支援

「支援がなかった」と回答したのは 7 団体（21.2%）でした。「十分にあった」、「少しはあった」を合わせると、18 団体（54.5%）がなんらかの支援は受けていました。支援元は、行政機関が 10 団体（55.6%）と最も多く、その他には地域の子育て支援団体などがあげられていました。

(4) 活動再開の可能性

「状況が変われば再開したい」、「誰かに再開してほしい」、「今はわからない」がそれぞれ 5 団体（15.2%）であり、「再開の必要はない」は 3 団体（9.1%）でした。すでに、別サークルや行政主催の会として活動形態が移行したとの回答もありました。12 団体（36.4%）からは回答が得られませんでした。

3. 多胎サークルの代表者調査の結果

104 団体の分析結果を示します。

1 サークルの基本情報

(1) 活動状況と活動開始年数

101 団体 (97.1%) が現在活動中であり、2010 年以前から活動を開始している団体は約 6 割 (64 団体) ありました。

(2) 主催者

多胎児の親による主催は 65 団体 (62.5%) であり、行政や子育て支援、福祉関係機関等が単独で主催するものは 16 団体 (15.4%)、親と行政などの支援機関が連携して共催しているものが 19 団体 (18.3%) ありました。発足から現在に至るまで主催者の変更はないものが 90 団体 (86.5%) でした。多胎児の親から行政関係機関への変更が 3 団体 (2.9%)、行政関係機関から多胎児の親への変更が 7 団体 (6.7%) でした。

(3) サークルの内容や運営方法

多胎児の親が決めているのは 76 団体 (73.1%) であり、親と支援者が相談して決める 16 団体 (15.4%) と合わせると、9 割近くが運営に多胎児の親が関わっていました。

(4) サークル参加への条件

- ① 地域的な制限や条件を持つのは 21 団体 (20.2%) であり、そのうちの 12 団体が行政機関の支援を受けているために、対象が市民に限られると回答していました。
- ② 年齢的な制限や条件を持つのは 36 団体 (34.6%) であり、そのうちの 23 団体が「入園するまで」、11 団体が「小学校入学まで」でした。「出産後から」という条件を持つのは 1 団体でした。
- ③ 参加者が、会費や参加費などの負担を必要とするのは 57 団体 (54.8%) でした。その内容は、年会費、実費の参加費が 27 団体 (47.4%) でした。保険料を徴収しているのは 1 団体 (1.8%) でした。

2 サークルの活動内容

(1) 活動の内容

9 割以上 (96 団体) が集会を実施し、イベントやランチ会などの交流活動も約半数が実施していました。育児用品のリサイクルは 73 団体 (70.2%) が行っていました。電話やメールでの相談活動は、会員に向けては 38 団体 (36.5%)、未入会家庭に向けては 19 団体 (18.3%) が実施していました。家庭や病院を訪問しての相談活動を実施しているのは 4 団体 (3.8%) でしたが、今後実施したいと考えている団体は会員に向けては 15 団体 (14.4%)、未入会家庭に向けては 17 団体 (16.3%) でした。

社会に向けた活動を実施している団体はいずれも 1 割未満と少なかったですが、今後実施したいと考えている団体が約 1 割ありました。

(2) 会員募集の方法

保健師などによる案内配付 (74 団体) と参加者の口コミ (71 団体) がそれぞれ約 7 割でした。ホームページやブログなどの Web サイトを利用しているのが 53 団体 (51.0%) でした。医療機関の協力を得ているところも 38 団体 (36.5%) と 4 割近くありました。その他では、「市の広報紙や子育て情報誌への掲載の他、行政主催の多胎児の会に出向いて広報する」といった回答もありました。

活動開始年

	(団体)	(%)
1987～1990	2	1.9
1991～1995	7	6.7
1996～2000	16	15.4
2001～2005	15	14.4
2006～2010	24	23.1
2011～2015	14	13.5
不明	25	24.0
無回答	1	1.0
計	104	100

サークル参加の費用

	(団体)	(%)
必要	57	54.8
必要でない	47	45.2
計	104	100

費用の内容 (複数回答) n=57

	(団体)	(%)
年会費	27	47.4
実費の参加費	27	47.4
毎回定額の参加費	10	17.5
入会金	6	10.5
保険料	1	1.8
その他	7	12.3

(3) 会員への連絡方法

会員用の連絡方法は、他の方法との併用も含めてメールで行う団体が最多でした。LINE など新しい SNS (ソーシャルネットワークサービス) の利用もされていました。

会員募集の広報方法 (複数回答) n=104

	(団体)	(%)
保健師などによる案内配付	74	71.2
参加者の口コミ	71	68.3
ホームページ、ブログなど	53	51.0
病院などでの掲示や配付	38	36.5
その他	24	23.1

会員への最も頻度の高い連絡方法

	(団体)	(%)
メール	37	35.6
LINE	23	22.1
Webサイト	14	13.5
メールと他の連絡方法の併用	12	11.5
郵送	4	3.8
電話	4	3.8
Web サイトと他の連絡方法の併用	3	2.9
FAX	0	0.0
その他	4	3.8
無回答	3	2.9
計	104	100

(4) 集会

① 開催の有無と頻度

集会を定期的で開催しているのは 90 団体 (86.5%) であり、不定期の開催が 6 団体 (5.8%)、開催していないのは 8 団体 (7.7%) ありました。定期的な開催の頻度は、1カ月に1回が 54 団体 (60.0%) で最も多く、1カ月に3回開催しているのが 3 団体 (3.3%) ありました。

② 会場

会場利用について、苦勞したり、困っていることがあると回答したのは 54 団体 (51.9%) であり、その内容は、「予約に会場まで行く必要がある」、「まとめて予約ができない」などの予約システム面での理由、駐車場やエレベーターなどの設備面での理由、会場費など費用面での理由があげられていました。

一方で助かっていることがあると回答したのは 93 団体 (89.4%) であり、そのうちの約 9 割 (81 団体) が無料の会場を利用していました。

会場利用で苦勞・困っている理由 (複数回答) n=54

	(団体)	(%)
予約に会場まで行く必要がある	18	33.3
まとめて予約できない	18	33.3
十分な駐車場がない	17	31.5
会場費がかかる	16	29.6
競争が激しい	16	29.6
エレベーターがない	8	14.8
その他	19	35.2

活動内容 (複数回答) n=104

		現在実施している	今後実施したい
会員を対象とする活動	集会 (例会)	96	92.3
	会報の発行	21	20.2
	電話・メールでの相談	38	36.5
	家庭や病院を訪問しての相談	4	3.8
	レクリエーション的なイベント	58	55.8
	ランチ会など	48	46.2
	研修会や学習会	15	14.4
	家事や育児の援助	4	3.8
	育児用品のリサイクル	73	70.2
	その他	13	12.5
未入会の多胎家庭に向けた活動	電話・メールでの相談	19	18.3
	家庭や病院を訪問しての相談	4	3.8
	家事や育児の援助	2	1.9
	講演会	5	4.8
	その他	23	22.1
会の運営に関する活動	他のサークルなどとの交流	26	25.0
	専門職との交流	16	15.4
	集会日程などの情報発信	58	55.8
	助成金の申請	23	22.1
	寄付金を募る	4	3.8
	その他	7	6.7
社会に向けた活動	育児制度の改善を求める運動	2	1.9
	専門職の理解を求める運動	4	3.8
	一般市民に理解を求める運動	3	2.9
	アンケートなどの調査	7	6.7
	その他	8	7.7

(団体) (%) (団体) (%)

集会の開催頻度

	(団体)	(%)
1カ月に1回	54	60.0
1カ月に2回(1~2回含む)	23	25.6
1カ月に3回(2~3回含む)	3	3.3
2カ月に1回	5	5.6
3カ月に1回	3	3.3
4カ月に1回	1	1.1
無回答	1	1.1
計	90	100

会場利用で助かっている理由 (複数回答) n=93

	(団体)	(%)
会場費無料	81	87.1
遊具・玩具の提供	44	47.3
数回分まとめての予約	24	25.8
問い合わせ先になってくれる	19	20.4
保管場所の提供	15	16.1
ネットや電話での予約	14	15.1
人的な支援	13	14.0
優先的な利用受付	11	11.8
利用料の割引	8	8.6
その他	13	14.0

その他、「遊具や玩具の提供」、「数回分まとめての予約」、「問い合わせ先になってくれる」などの支援を受けているところがありました。

③集会の内容

会員が近況報告や悩みなどを共有する時間は、46 団体（44.2%）が毎回持っており、「持つ時と持たない時がある」を含めると 8 割以上が集団でのピアサポート（同じ経験をした仲間による支援）活動を行っていました。

集会でのプログラムの用意は、「毎回する」と「まったくしない」がそれぞれ 21 団体（20.2%）でした。

評判の良かったプログラムとしては、クリスマス会やハロウィン、七夕、運動会、いちご狩りやみかん狩りなど季節の行事や遠足の他に、リトミック、親子体操、クッキング、工作、人形劇、絵本の読み聞かせ、キッズマッサージなど親子で楽しむプログラムと、フリーマーケット、会を卒業した先輩ママ（以下 OG と記載）との交流会や専門職による相談会、子どもたちを預けてのお茶会やランチ会、フラワーアレンジメント、マッサージなど、親向けのプログラムがありました。

(5) 活動費

活動費がないところは 31 団体（29.8%）でした。会費収入があるのが 50 団体（48.1%）、行政や社会福祉協議会などからの経常的な助成金があるのは 23 団体（22.1%）でした。

活動費で苦勞したり、困っていることがあると回答したのは 58 団体（55.8%）であり、その理由は「会員の負担を増やしたくない」が 41 団体（70.7%）であり、会員への配慮をあげていました。助成金の申請や報告の書類作成の負担が大きいとの回答もありました。

活動資金を得る工夫として、会員や OG から無償提供される玩具の利用、衣類の安価での販売、社会福祉協議会やイオングループのイエローレシートキャンペーンへの登録による助成金の獲得、子育て支援センター等への登録による会場費の無料化、助成金の積極的な申請などの記述がありました。

3 サークルの運営主体と支援や連携

「多胎サークルは誰が主となって運営するのが良いか」との問いに対しては、「育児中の多胎児の親」が 39 団体（37.5%）、「就園・就学した多胎児の親」が 27 団体（26.0%）であり、「多胎児の親」（当事者）が主となるべきだとの回答が 6 割以上でした。「市区町村」（20 団体：19.2%）、「民間の育児支援者」（10 団体：9.6%）など支援者が運営するべきだとの回答は 3 割以下でした。

その一方、自治体など他機関や団体からの支援が必要と回答しているのは 88 団体（84.6%）であり、実際に 80 団体（76.9%）が支援を受けていました。

必要な支援の内容は、活動場所や人手、資金などの具体的なもの以外にも、相談など親に対する支援や案内の配付などの広報的な支援もあがっていました。

近況や悩みなどを共有する時間

	(団体)	(%)
毎回持つ	46	44.2
持つ時と持たない時がある	41	39.4
持たない	11	10.6
無回答	6	5.8
計	104	100

集会でのプログラムの用意

	(団体)	(%)
毎回用意する	21	20.2
用意することが多い	17	16.3
半数ぐらひは用意する	8	7.7
用意しないことが多い	31	29.8
まったく用意しない	21	20.2
無回答	6	5.8
計	104	100

活動費の得どころ

(複数回答) n=104

	(団体)	(%)
活動費はない	31	29.8
会費	50	48.1
経常的な助成金	23	22.1
公募の助成金	12	11.5
事業収入	11	10.6
寄付金	5	4.8
負担金	4	3.8
その他	11	10.6

活動費で苦勞・困っている理由

(複数回答) n=58

	(団体)	(%)
会員の負担を増やしたくない	41	70.7
助成申請や報告の書類作成	28	48.3
継続的な助成金がない	19	32.8
資金管理が大変	10	17.2
スタッフの持ち出しが多い	9	15.5
会員が負担を嫌がる	1	1.7
その他	5	8.6



必要な支援の内容（複数回答） n=88

	(団体)	(%)
活動場所の提供や利用料の割引	50	56.8
人的な支援	42	47.7
親に対する支援	37	42.0
資金的な援助	23	26.1
広報的な支援	21	23.9
遊びの提供	19	21.6
連絡先になってくれる	16	18.2
運営相談などサークルに対する支援	13	14.8
物品的な支援	10	11.4
専門的な支援	9	10.2
その他	2	2.3

運営での心配事、困っている内容（複数回答） n=88

	(団体)	(%)
後継者	52	59.1
会員数	41	46.6
精神的負担	22	25.0
活動内容や計画	21	23.9
協力者や支援者	20	22.7
活動資金	17	19.3
活動場所	14	15.9
物理的負担	9	10.2
広報	7	8.0
行政との連携	6	6.8
サークルの連絡先	5	5.7
会計管理	2	2.3
会員間のトラブル	1	1.1
経済的負担	1	1.1
医療との連携	0	0.0
他団体との連携	0	0.0
その他	7	8.0

4 サークル運営面での心配事や困っていること

88 団体（84.6%）が運営面での心配事や困っていることがあると回答していました。その内容で最も多いのは後継者の問題で52 団体（59.1%）、次いで会員数の問題が41 団体（46.6%）でした。

「支援によって問題が解決した印象的な出来事」を質問したところ、「サークル内部の協力の他に、行政・福祉・医療関係者や子育て支援者からの会場の提供や広報に関する支援」、「社会福祉協議会や保育園、保育系の短大や専門学校からの人的な支援や遊びの提供」を受けている、など 42 団体（40.4%）の具体的な経験談が得られました。

5 サークル運営について相談できる人

運営について相談できる人がいるとの回答は96 団体（92.3%）であり、相談できる人がいないのは5 団体（4.8%）でした。相談相手は、スタッフや OG、参加者などサークル内部の人が上位となりました。

相談できる相手（複数回答） n=96

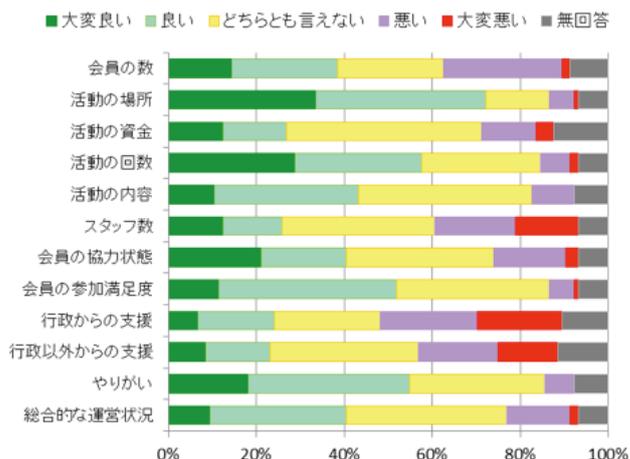
	(団体)	(%)	(団体)	(%)	
サークルスタッフ	61	63.5	福祉の職員	11	11.5
サークル OG	49	51.0	民間の子育て支援者	8	8.3
子育て支援センター職員	35	36.5	医療関係者	7	7.3
参加者	32	33.3	地域の支援者	6	6.3
他のサークル代表	21	21.9	研究者	4	4.2
保健師	17	17.7	一般の方	1	1.0
家族	15	15.6	その他	5	5.2

6 サークルの運営状況

サークルの総合的な運営状況は、「大変良い」と「良い」を合わせて42 団体（40.4%）であり、半数以上は悩みや課題をもちながら運営していました。特に「悪い」、「大変悪い」が多い項目は、外部組織からの支援と、会員の数、スタッフ数などでした。

(1) 会員

今回の調査では「会員」の条件について規定をしませんでしたので、会員数は3～80 家庭と幅広い回答となりました。会報の受取りのみや、「卒会」という規定がないサークルなどでは会員数が多くなっているようでした。しかし、今回、集会等で会員用調査票の手渡しをお願いした数から見積もると、普段の集会等の参加者数は、5～15 家庭が47 団体（45.2%）と推定されました。



会員の母親については、産前産後休暇と育児休暇中を含む職者がほぼ半数～半分以上だったのが47団体（45.2%）でした。育児や家事と仕事を担いながら、サークルを運営する負担は大きく、後継者やスタッフ不足の問題を抱えるサークルの背景が想像されました。

参加者の年齢別内訳では、1～3歳の多胎児のいる家庭が最も多く62団体（59.6%）でした。一方、4～6歳や小学生の年齢層が多い団体も見られました。

父親の参加については、「ほとんどない」、「まったくない」を合わせると53団体（51.0%）であり、「ほぼ毎回ある」は1団体（1.0%）のみでした。集会在平日のみに開催されるのが70団体（67.3%）であることから、父親の参加は時間的に難しい可能性があります。母親の有職者の増加に合わせて、土日祝日での開催（26団体：25.0%）や夜間の開催（4団体：3.8%）などを工夫するところもあり、今後は父親の参加にも期待したいところです。

(2) 役員やスタッフ

調査票の回答者は、92人（88.5%）が多胎児の親でした。多胎児の子の年齢が3歳以下で自身の子どもも連れて参加しているだろうと思われる方が約4割であり、自身の子は就園・就学している年齢以上の方が約6割でした。その就業状況は、42人（45.7%）が無職、パート・アルバイト勤務が24人（26.1%）、フルタイム勤務が10人（10.9%）、自営業または自由業が6人（6.5%）でした。

回答者の役職名としては、代表者または事務局が83団体（79.8%）でした。役職の交代については、「毎年交代」の決まりがあるのが20団体（19.2%）でしたが、それ以外は明確な交代の規定はないようでした。まだ1度も交代していないのが30団体（28.8%）ありました。代表交替に際しては、「前任者が指名する」（28団体：26.9%）に次いで「複数になる」が17団体（16.3%）ありました。1人に負担が集中しないような工夫が見られました。

役職の在職期間は、5年未満が70人（67.3%）であり、10年以上の長期間にわたり代表を務めている人が16人（15.4%）でした。

役職についた理由は、「自分自身が世話になったから」（27人：26.0%）、「必要性を感じて自分が立ち上げたから」（26人：25.0%）という積極的な理由が上位を占めました。「他にできる条件の人がいない」、「頼まれたから」といった消極的な理由を上回っていました。

代表になった最も大きな理由

	(人)	(%)
世話になった	27	26.0
必要性を感じて立ち上げた	26	25.0
他に出来る条件の人がいない	19	18.3
頼まれたから	15	14.4
業務（仕事）として	6	5.8
順番・くじ引きで仕方なく	3	2.9
その他	6	5.8
無回答	2	1.9
計	104	100

母親の就業状況

	(団体)	(%)
無職者のみ	11	10.6
無職者が半分以上	37	35.6
ほぼ半数	22	21.2
有職者が半分以上	25	24.0
有職者のみ	0	0.0
無回答	9	8.7
計	104	100

会員家庭の内訳で最も多い年齢層

	(団体)	(%)
妊娠中	0	0.0
乳児（0歳）	10	9.6
1～3歳	62	59.6
4～6歳	18	17.3
小学生	13	12.5
中学生・高校生	2	1.9
高校卒業以上	0	0.0
無回答	12	11.5

※最も多い年齢層が複数回数であった場合（11団体）は重複してカウントしている

役職交代

	(団体)	(%)
毎年交代	20	19.2
何年かに1回交代	1	1.0
交代理由ができたとき	44	42.3
まだ1度も交代していない	30	28.8
その他	6	5.8
無回答	3	2.9
計	104	100

役職在職期間

	(人)	(%)
1年未満	21	20.2
1年以上2年未満	22	21.2
2年以上3年未満	13	12.5
3年以上5年未満	14	13.5
5年以上10年未満	14	13.5
10年以上15年未満	10	9.6
15年以上20年未満	4	3.8
20年以上	2	1.9
無回答	4	3.8
計	104	100

役職については、「できるだけ続けたい」(16人:15.4%)、「問題がなければ続けようと思う」(37人:35.6%)と肯定的であり、「すぐにでもやめたい」と思っている人はいませんでした。

しかし、「活動をやめたいと思ったことがある」は45人(43.3%)であり、その理由は、「後継者が見つからない」(19人:42.2%)、「精神的な負担」(18人:40.0%)、「時間的な負担」(16人:35.6%)といった役職における負担感が上位にあがっていました。

それでも活動をやめなかった43人(95.6%)の理由としては、8割以上が「必要性を感じていた」と回答していました。多胎サークルの活動の意義を代表者自身が理解して活動していると思われました。また、内部(仲間)や外部からの支援が、活動を継続する力になったとの回答もありました。

代表者たちの103人(99.0%)が、活動にやりがいや喜びを感じていました。その内容としては、「子どもたちの成長」(67人:65.0%)、「子どもたちが楽しそう」(64人:62.1%)など、子どもたちの様子に関するものが上位となり、続いて「自分自身が楽しい」、「参加者から感謝される」、「自分に仲間ができる」という自分自身の喜びに関するものがあげられました。また、「参加者やその家族から感謝される」、「参加者の変化を感じる」、「自分に仲間ができる」といった、セルフヘルプグループ活動そのものの効果に関する回答もみられました。

サークルの必要性については、92人(88.5%)が「とても感じる」と答え、「まあまあ感じる」を含めて、全員がサークルの必要性を感じながら活動していました。必要性を感じる理由としては、「多胎の仲間が必要」、「単胎と異なる点が多い」、「一般のサークルには参加しづらい」といった、「多胎であること」に関するものが選ばれると共に、「育児不安の解消、虐待の予防」、「顔の見える関係が大事」など、一般の子育てサークルにも共通する理由があげられていました。

やめたいと思った理由

(複数回答) n=45

	(人)	(%)
後継者が見つからない	19	42.2
精神的負担	18	40.0
時間的な負担	16	35.6
新規会員が増えない	13	28.9
子どもの成長	9	20.0
復職・就職	8	17.8
意欲の低下	6	13.3
活動資金の問題	6	13.3
家族の反対	5	11.1
会員の卒会、退会	5	11.1
活動場所の問題	5	11.1
他の家族の健康問題	4	8.9
他団体の活動	4	8.9
経済的負担	3	6.7
支援の不足、中止	3	6.7
自分の健康問題	1	2.2
多胎児の健康問題	1	2.2
会員間の意見の相違	1	2.2
他の多胎の会の発足	0	0.0
Web情報の充実	0	0.0
その他	4	8.9

やめなかった理由(複数回答) n=43

	(人)	(%)
必要性を感じていた	36	83.7
仲間が助けてくれた	18	41.9
外部からの支援	10	23.3
その他	8	18.6

活動にやりがいや喜びを感じるか

	(人)	(%)
感じる	103	99.0
感じない	0	0.0
無回答	1	1.0
計	104	100

サークルの必要性

	(人)	(%)
とても感じる	92	88.5
まあまあ感じる	12	11.5
あまり感じない	0	0.0
まったく感じない	0	0.0
計	104	100

やりがいや喜びを感じること(複数回答) n=103

	(人)	(%)
子どもたちの成長	67	65.0
子どもたちが楽しそう	64	62.1
自分自身が楽しい	61	59.2
参加者から感謝される	59	57.3
自分に仲間ができる	58	56.3
参加者の変化を感じる	48	46.6
子どもたちに友達ができる	33	32.0
参加者が増える	33	32.0
専門職からの応援	25	24.3
参加者の家族に感謝される	22	21.4
その他	6	5.8

必要性を感じる理由(複数回答) n=104

	(人)	(%)
多胎の仲間が必要	83	79.8
単胎と異なる点が多い	74	71.2
育児不安の解消、虐待防止	65	62.5
一般サークルに参加しづらい	51	49.0
顔の見える関係が大事	44	42.3
その他	5	4.8



4. 外部からの支援を活用し、積極的な活動をしているサークルの実践例

多胎育児サークル ハッピーキッズ旭川支部

<http://happykidsasahikawa.blog.fc2.com>

- | | | | | | |
|-------------|--|---------------|----------------|--------------|------|
| 発足年 | 2004年 | 主な活動地域 | 北海道旭川市、鷹栖町 | スタッフ数 | 7名 |
| 代表者 | 金森聖美さん | 会の形態 | 多胎児の親による自主サークル | 会員数 | 34家庭 |
| 主な活動 | 集会(不定期)、電話・メール相談、レクリエーションイベント、研修会や学習会、誕生日カードの発送、他の多胎サークルや多胎支援団体などとの交流や専門職との交流、町の福祉大会等への参加・発表 | | | | |
| その他 | 2013年 発足10周年記念講演会を開催
2015年 子育てボランティア養成講座・多胎育児座談会を開催 | | | | |

町の社会福祉係への自身の外出支援の依頼をきっかけに、町社会福祉協議会などと代表者がつながり、支援を受けて活動をしているサークルです。「外部からの支援があつてこそこのサークルだ」と代表者は考え、社会福祉協議会には、会場の確保、育児ボランティアの依頼と人数の確保、育児ボランティアの役割を明確にして貰うことなどと、財源や運営の相談等への対応などを依頼しています。

10周年記念講演会では、医療・行政・保育・教育の専門職を含む総勢60名が、運営協力者として関わりました。なかでも、総数が76名にも上った託児では、年代別プログラムを導入することにより、実施内容や役割分担が明確にされ、多数のボランティアが混乱することなく、子どもたちの安全性と満足度の高い託児が行われました。

多胎児サークル ころころピーナッツ

<http://koropi2525.hamazo.tv/>

- | | | | | | |
|-------------|---|---------------|----------------|--------------|-----------------------|
| 発足年 | 2006年 | 主な活動地域 | 静岡県浜松市 | スタッフ数 | 5名 |
| 代表者 | 高山ゆき子さん | 会の形態 | 多胎児の親による自主サークル | 会員数 | 参加者は約15家庭
※会員制ではない |
| 主な活動 | 集会(月3回)、リサイクル、浜松市内外の多胎サークルや専門職との交流、情報発信、寄付金募集活動 | | | | |
| その他 | 「ころころピーナッツ」は、参加者の安全面などを考慮して、妊婦から乳児期の多胎児を育てる家庭に限定して開催するようになった会。スタッフは同じメンバーである。 | | | | |

発足時から現在に至るまで、育児支援団体(NPO 法人ころころねっと浜松)や市の保健センターや市内外の他の多胎サークルとの交流を常に持ち、情報や支援などをうまく活用しているサークルです。

サークル発足時には、育児支援団体の代表者が「多胎家庭が多く集まるには駐車場の確保が必要だ」と考え、市の保健師に会場の提供を働きかけたことで、現在に至るまで保健所の1室がサークルの会場として月に3回無償提供されています。また、その育児支援団体では、「多胎児ファミリー応援活動」として、サークル運営の支援や情報提供を行っており、先輩ママが自宅や病院に訪問するピアサポート活動の他、各多胎サークルのイベント情報を掲載した通信紙や、多胎家庭の声を集めた『ふたご・みつご子育てBOOK』の発行をしています。ころころピーナッツのスタッフは、これらの活動にもメンバーとして加わり、地域での幅広い多胎支援活動に積極的に関わっています。

【自由記述から】これまでのサークル運営で良かったと思う取り組みや工夫、システムや決め事

みなさんが書いて下さった回答の一部をご紹介します。活動のなかで、それぞれの状況に合った方法をその都度選択しながら、運営されてきた様子がうかがえます。

【会員・スタッフ・役割分担】

◆代表は変えない。 ◆1年で世話係(スタッフ)を交代する(1年という期間が明確なことで引き受けやすい)。 ◆毎年交代で「やってあげている」感を軽減。 ◆双子が就園してサークルを卒業してもサークル開催日に手伝いに来てくれる人を募る。都合がつくときだけでOK。 ◆未就園児だけでなく、それ以上の年齢の親にも会に残り、アドバイスをしてもらったりする方が会として長くやっていく。 ◆役員は様々な子ども年齢層の人間で構成。 ◆多胎の親は忙しくなかなか会の運営は大変なので、8人のスタッフがいて継続しているが、最近卒業生の協力参加があり、運営にとっても有効に働いている。 ◆スタッフの数を限定することなく、やりたい人は皆スタッフとして活動に参加してもらった。最大 15 人くらいで皆やりがいを感じ楽しそうだった。 ◆スタッフを複数にし、無理はお願いしなかった。 ◆できる人が、できる時に、できる事をやる、というシステムなので、負担感が少なく、細々とではあるがお互いを気遣いながら続けてこられた。 ◆代表者引き継ぎの際、残るメンバー全員で話す場を設け、代表だけではなくみんなで分担するという話をする事でみんなで協力する雰囲気になる。 ◆大きくなった子どもたちにボランティアとして参加してもらう。 ◆年齢制限をやめて幅広い年齢層の子ども達がみんなで遊べるようにした。 ◆就園児以上の親、親子も楽しめる行事がある。 ◆子どもの年齢に関わらず会員になれること。

【広報や会員との連絡】

◆母子手帳配付時に保健師から、「妊婦さん大歓迎」とサークルの案内をもらう。体調の良い時に来てもらい、LINEのグループに入ってもらうことで産後の悩み相談も受けられるし、早い時期にサークルに来てもらえる。 ◆ブログを始めたことでより周知されるようになった。 ◆ブログを通して情報発信をしているが、隣市からの参加や妊娠中からの読者の方多く、続けていきたいと思っている。 ◆マスコミを上手に使うこと。記者を特定しずっと追ってもらうことで信頼関係ができて有効であった。 ◆今年から LINE も使うようになり、写真の共有等で更に交流が深まった。 ◆連絡をLINEにしたのでグループ送信できて楽になった。 ◆勧誘用の名刺を作った事で、会員数が増えた。

【連携】

◆保健センターとのつながりを持つ。 ◆子育て拠点と共催の「双子フリマ」 ◆区で毎月子育てサークルの責任者が集まる定例会議がある。参加者は他に子育て支援センター、保健福祉センター、保健師、社会福祉協議会、図書館長、ファミサポ、子育てプラザなど15名ほど。この会議での情報交換はとても重要。

【会費】

◆年会費として 700 円集めていること。 ◆会費制をやめて、イベント毎の参加者のみの徴収にした。 ◆会費なしで行っているので、多胎児の親に負担をかけず広い場所でゆっくり遊べるよう、参加できる時に自由にストレスを感じずに参加してもらえよう、イベントも年 4、5 回で、後は退出自由の「自由遊び」にしている。

【内容】

◆クリスマス会&ママだけのランチ会。 ◆リサイクルマーケット。お揃いの安価または無料での提供は、多胎児の親にとってとても助かる。収益も得られる。 ◆スタッフが託児し、ママはヨガや話し合いに参加する。子どもと離れて(一時間)活動できることがよかったと言われる。 ◆子育てサポーター(ボランティア)が子どもを見る事で親同士が情報交換しあえる。 ◆サークル会員で学習会、リサイクル、イベントを企画、運営して楽しんで来たのが良かった。ただ、年度により楽しまれている時と負担に感じられている時があった。 ◆会報誌を互いに提供する(みんなで紙面づくり) ◆少数グループでの交換ノート、顔合わせ。 ◆交換日記。みんなで情報を共有する。 ◆会の終わり 30 分前くらいにお茶の時間を設ける(口に物を入れると話し易くなるため)。 ◆プレママ相談員(プレママ会員へ1対1で先輩ママがメールにて相談を受付)。 ◆出欠をとらず、参加は自由。来るものは拒まず、去る者は追わずで、「行こうかな」と思った時にいつでも参加できる。参加者の「行かなければ」という精神的負担が全くないところ。 ◆月2回の活動で毎回出欠をとる事。 ◆特別なことはしない事が最大のリラックスにつながったと思う。 ◆駐車場や会場の外へ迎えに行き、車の乗降のお手伝い。

謝 辞

今回の調査にご回答いただきました全国の多胎サークル・多胎の会の代表者、世話役などの皆さまにお礼を申し上げます。サークルの同定や調査票の作成には、研究協力団体である、いしかわ多胎ネット、ひょうご多胎ネット、一般社団法人日本多胎支援協会の皆さまにご協力をいただきました。この報告書は、2016年2月28日に金沢市で実施しました全国6か所の多胎育児支援者との検討会の内容を反映させています。また、並行して行いました行政機関に対する調査からも、地域の多胎の会に関する情報を多数お寄せいただきました。データの入力・整理の作業は、森みちよさんをはじめとする石川県立看護大学のアルバイトの方々に関わってくださいました。データ集計及び図表の作成や本冊子のレイアウト等に関しては、山梨大学の人間関係学部に所属する山梨大学の大間敏美さんに多大なご協力をいただきました。

本冊子の刊行に関する助成

平成 27 年度 石川県立看護大学学内研究助成金 研究プロジェクト助成
「多胎育児支援の実態に関する全国調査とセルフヘルプグループの意義」